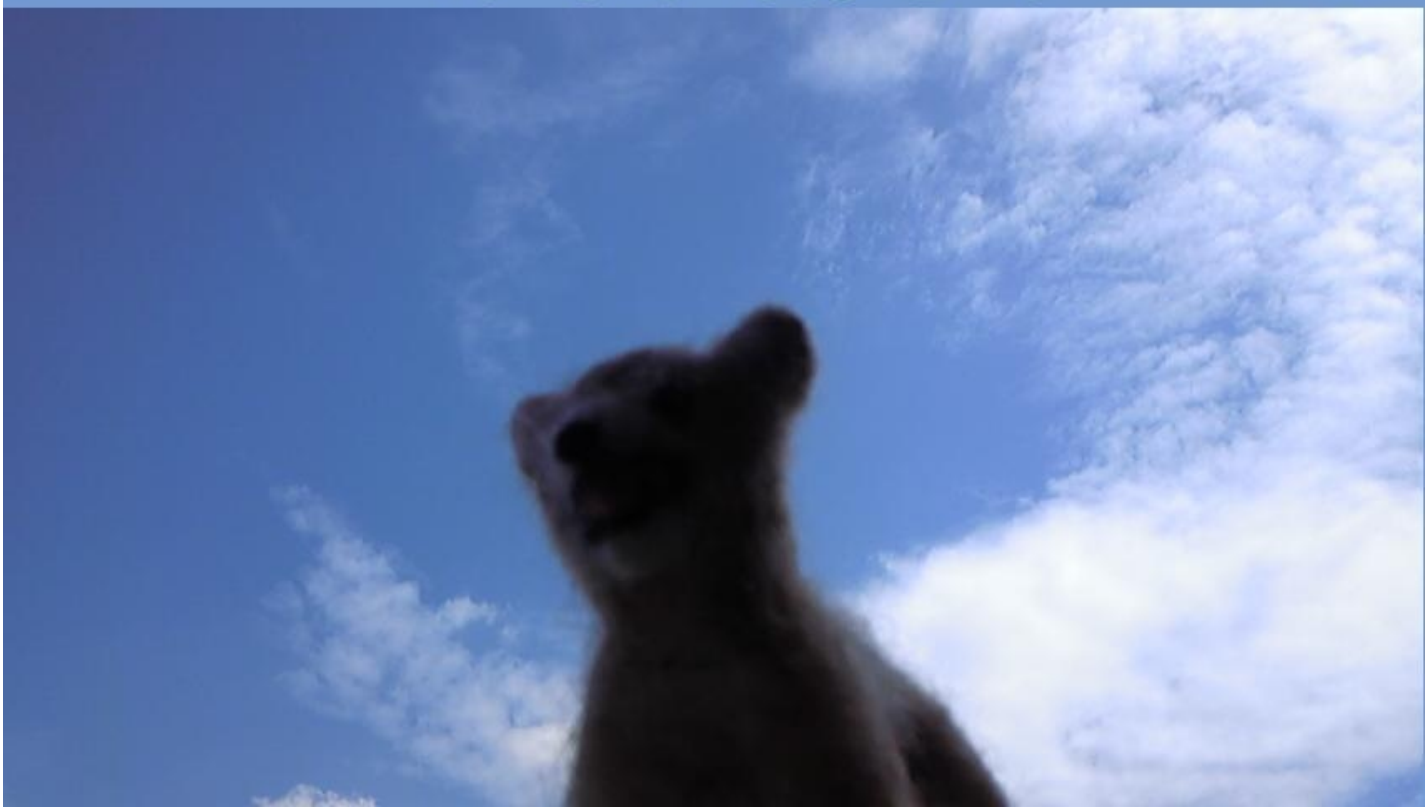
のくのくあるく

まる



ときまる、散歩に出かけるとクーに出会う。

ちょっと出かけてきます。

ママさんにそう言って、柴犬のときまるはお散歩に出かける準備をしました。

今日は秋晴れでくんくんすると風がいろいろな匂いを運んでくれるんです。

そんな日に、おうちでじっとしているなんて出来ません。

ママさんは、「まる、気をつけてね。」というとお庭で

タオルをパンパンとたたいて物干し竿にほしました。

ママさんもこんなお天気の良い日は一緒にお散歩したいんですが、

お洗濯ものも干さなきゃいけないんです。

ときまるは「はい。」と返事をすると、

ママさんにちょっと悪いなぁ、と思いながら散歩にでかけました。

「ママさんもパパさんも大変だ…。」

そんなことをちょっとだけ考えましたが、すぐに忘れました。

だって、隣の家の猫のクーが、やってきたからです。

「こんにちは、まる。」

クーはときまることを、「まる」と呼びます。

なんでも、ときまるっていう名前は長くて舌を噛んじゃうからというのが理由だそうです。

でも、ときまるは「たった四文字じゃないか」と思いましたが口に出しては言いませんでした。

クーが案外気難しいんだっていうことを知っているからです。

「こんにちは、クー。よいお天気ですね。」

「そうだね。ところで、どこへ行くの？」

「えっと、決めてないんだけど、どっか行きたくなったんです。」

「うーん、僕はまるのそういう短絡思考はどうかなと思うよ？」

「た、ん…なんですって？」

「た・ん・ら・く・て・き・し・こ・う」

クーはちょっと偉そうに言いました。

ときまるは思いました。

ときまるって呼ぶのがめんどくさいくせに、こういう長い言葉はちゃんというんだなって。

でも口に出しては言いませんでした。

だってクーは…いや、クーというより猫は気難しい…ま、さっきもいいましたからね。

わかるでしょ？

「うーん…君は？君はどこへいくの？」

クーはちょっとどきっとしました。

だって、クーは窓の外からときまるがお隣のママさんに「いってきます」というのを聞いて

外にでたのですから。

特にどこへいく…なんて決めていません。

ただ、最近まるとお話してないなぁ、と思っただけなんです。

でも、それを彼に言うのはなんだか嫌でした。

「僕？僕はね…魚正さんの仕入れの状況をママさんからチェックするように言われたんだ。僕にはそういう使命があるのさ。僕のママさんは今日は絶対さんまが食べたいんだって。そりゃ僕だってさんまは大好きさ。秋の魚だものね。秋って言ったら紅葉の次にはさんまって絶対答えるよね。それっくらいさんまが好きなんだ。」

「へぇ…。」

一生懸命作り話を披露したわりには、ときまるの答えはたったそれだけでした。

「んじゃ、僕はお肉のケンちゃんの匂いをかぎにいこうかなぁ。」

ときまるがそういうと、クーはとってもうれしくなりました。

だって、魚正さんと、お肉のケンちゃんはお隣どうしなんですもの。

ということは、ずっと一緒にいられるんです。

そうして、二匹は近所の商店街へと足を向けました。

クーは何か考え深げに、実際は何も考えてなかったのですが、こう言いました。

「僕はあくまでも任務を遂行しに…そして、まるは…、」

「あ、僕はね、ただ匂いを嗅ぐだけでいいんですよ。だって、それだけで幸せになるじゃ…あっ！」

「へ？」

「みて！？　すっごい、お知らせだよ！」

電信柱の前でクンクン臭いをかぎながら、ときまるはクーに言いました。

クーは思いました。

まるってホントに自由だなと。

やりたい放題だなと。

クーと一緒に秋を語らいながら歩きたいのに、魚正さんの長男がサラリーマンを辞めて家業を継ぐんだってとか、

そんな話もしたいのに、それどころか、お嫁さんもつれて帰ってくるんだって！ということも教えてあげたいのに。

なのにときまるは、くんかくんかと電信柱を嗅ぎまわっているんです。

あぁ、もうそんなに熱心に嗅がなくとも犬は嗅覚にすぐれてんじゃないのか？と

言いたくなりますが、あまりの熱心さに流石のクーも空を見上げるばかりです。

その時、突然ときまるが大声でいいました。

とっても嬉しそうに。

「解読できた！あのね、魚正さんの息子さんが、サラリーマンやめて家業を継ぐんだってさ！」

クーは思いました。

犬社会のそういった慣れ合いってやっぱ好きじゃないなと。

だってクーはママさんに聞いたのです。

正確にはママさんが誰かと電話で話していたのを聞いたのです。

なのに、まるは電信柱から聞いたのです。

いや、正確には電信柱に残された犬社会の情報網から…。

「ふーん。」

そういうとクーは先に歩き出しました。

そして、ハッと気がつきました。

広い道の両脇に等間隔に並んでいる電信柱を…。

「まる…これから君は電信柱という電信柱をくんかくんかするつもりかい？」

クーはそう言って振り返ると

案の定、ときまるは反対側の電信柱を熱心に嗅ぎまわっている最中でした。

「…ですよね…。」

クーはそういうと、黙ってときまるを見守りました。

つづく

ときまるとクー、チビに絡まれる。

ときまると、クーの二匹は、のくのくと小道を歩いていました。

クーはそれでも辛抱強くときまるが電信柱の前で立ち止まれば、待ってあげました。

クーはこれでも忍耐強いほうなんです。

ときまるも、気になる電信柱の時だけ、これでもかと嗅ぎまわりました。

あまりクーを待たせても悪いなって、11本目くらいで気がついたからです。

さて、もう少し行けば商店街へたどり着きます。

そう、あの角を曲がれば

『なかまち銀座』

と、いう商店街が現れるんです。

「ねぇ、なんで銀座？銀座ってたしか東京の銀座だよね。ほら、和光とか三越とか、ライオンがいるところ。」

「三越とライオンじゃなくて、三越のライオンだ」と、クーがときまるの勘違いを直そうと思った時です。

クーの狭い額の上に何かが乗っかりました。

「あ！チビ！」

ときまるが、とてもうれしそうな声をあげました。

チビと呼ばれたのは、黄色と緑のインコで、ときまるの裏のおばぁちゃん家で暮らしているインコでした。

「よっ！とき！元気かい？」

ちびはときまるのことを「とき」と呼びます。

理由はわかりませんが…。

その時です。

クーが物凄い不機嫌な声で言いました。

「ねぇ、チビ…なんで、僕の頭の上に乗るかな…。」

「あぁ、だってそうすればトキと同じ目線になるだろ？だからさ。」

「目線？んじゃ、僕は踏み台か。踏み台の役目ということか？僕には挨拶がないのかい？よ！クーさん、お元気そうでなによりです。とか…そういう気の利いたことも言えないで、僕を踏み台扱いかい？」

チビはジッと短く泣いただけでした。

チビは気に入らないとジッという声を出して相手を威嚇する癖…というか習性があるんです。

「また、得意のジッですか？」

クーがあきれた顔で言いました。

そんな二人のことを見守りながらも、ときまるは、曲がり角にある電信柱が気になってしかたありません。

そこからは『早く早く!』という切羽詰まった匂いがするのです。

これはきっと、誰かからの緊急メッセージのはずです。

でもチビとクーはそんなときまるの心も知らずに険悪な雰囲気です。

「まぁまぁ…そうだ！僕の背中に乗ればいいよ。そうしたら、今度はクーと目を合わせてお話しできるでしょ？」

ときまるが提案してみます。

だけど、チビは言いました。

「やだね…クーは俺の事、食おう食おうっていう魂胆丸見えだからさ。猫なんてそんなもんさ。」

「し、失礼な！僕は生ものは食べない主義なんだ！しかもいつまで僕の額の上に…ええい！空を飛べ！空中待機してろ！」

「お前は俺の管制塔かっ！？」

そんな掛け合いを聞きながらもときまるは、やはりあの電信柱が気になります。

「で…ときは何してんの？」

「ときと僕だ！」

相変わらず負けじとクーも主張します。

「あ、っと、僕は…なんだっけ？電信柱…じゃないや…えっと…。」

「僕とまるは、物凄い使命をママさんから受けて商店街へと向かっているんだよ。」

なぜか得意げにクーが言いました。

「へぇ…でもときは電信柱のほうがっ気になるんじゃない？」

「え！？」

クーがときまるを見つめます。

「ったく…なにも見えてやしない…これだから地面を這うケモノときたら。」

と言い捨てて、ちびは青空へ吸い込まれそうになるほど、高く飛び立ちました。

「じゃな！とき！」

そして、だいぶ高く上がった時に

「またな！クー」というと、その姿は見えなくなってしまいました。

「…きみはやっぱり電信柱が気になるんだね…。」

「うん。でもあの電信柱だけは特別なの。」

ときまるはそういうと、わんわんと吠えながら電信柱に走っていきました。

つづく